が全部さうである。京都がさうである。三條にしても柳原にしても、田中にしてもさうだ。大阪がさうだ。名古屋がさうだ。東京萬年町がさうだ。「願人坊主」なども勿論一種の起源ではあるけれども、穢多も多く集つたらしい。その外地方の貧民窟に於て殊にさうだ。又特別に近頃になつて、地方の特殊民は都會の平等主義の方が遙に彼等の田舍の生活より壓迫が少ないから、皆擧つて都會へ流れ込むのである。即ち都會の貧民窟と云ふのも頗る怪しいもので、都會の貧民窟の或者などを調べると、決して出生地を云はない、(死んでも云はないものが多い。私は之を屢々見た)が之は皆穢多族で、云ふを欲しないのである。

それで、都會の貧民窟と云つても、實は穢多的結合をして居るものが多いので、殆ど人種的と云つてよからうと思ふのである。

東京の今日の貧民が然しどれだけ穢多から成立つて居るかと云ふことはわからぬが、よく調べたら或は貧民の三分の二以上が穢多であるかも知れないと私は思つて居るのである。之はだから日本の貧民窟研究に志すものが決して忘れてはならない、人種的貧民分解法である。之は歐米都市に於ける圓頭人種と長頭人種の分類と少しも違はぬ大問題である。

第二節　東京の貧民。東京と大阪との貧民窟に就て云ひ殘したから一寸と此處で述べやう。然し先づ斷つて置かなければならぬことは、貧民窟が波の打つ樣に移つて行くことである。ことに近年東京の貧民窟の郊外の方へ移つて行く勢の早いことは實に驚く可きで、これまで三大貧民窟と云はれた下谷萬年町も、四谷鮫ヶ橋も芝新網も今は殆ど其形を失ひ。今日では本所横川町、長岡町、淺草神吉町、業平町、淺草町、玉姫町、今戸町、新谷町の貧民窟などが貧民の低度の激しいものとなり、新宿の方にも貧民窟が現れ、巣鴨にも現れ、王子にも現れる樣になつた。此傾向は大阪に於ても同樣である。之はロンドンなどゝ全く違つた處であるが。可哀想な點から云ふならばロンドンの方が可哀想である。

東京の貧民窟は先に云つた樣に殆ど今日に於ては東京市の周圍を包圍する樣になつて居るが、實に日本中で最も悲慘なものである。然し日本一般の貧民窟の常として穢多が都市に流入して、如何なる下等なる生活をも辭しないと云ふ一種特別なやりかたをするので、東京の貧民がどれだけ穢多族であるかは問題であると云ふことは前云つた通りである。東京市の細民數は市役所の研究によれば、二十萬五千二十六人(四十四年)となつて居る。日本では死亡率が增す程度の文明に居るから四十四年以後東京の貧民も殖えて居るであらう。

中央の貧民窟に就ては既に前に町名をあげたが、茲に山の手の貧民窟を擧げると麻布では廣尾川附近、小石川では初音町、戸崎町、掃除町、西丸町、牛込では鶴巻町、赤坂では裏町邊の一部が貧民部落をなして居る。猶東京の殘飯屋は近年其數が減少して居る相である。

區名	人口	戸數	細民概數	細民推定總數	中學齢兒童數	特殊小學校收容數
麴町	五三、三三〇	一一、五〇七	不明	不明		○
神田	一六三、二二三	三八、五六二	不明	不明	○	
日本橋	一二四、二九二	二〇、八四五	不明	不明	○	
京橋	一二六、八九一	三五、九六三	不明	不明	○	
芝、	一三七、七九九	三四、一六〇八	三、七三一	五、二三	五七一	
麻布	七三、五三〇	二六、二二九	二、六二二	三六七	五一七	
赤坂	四七、九九四	一二、〇五五	五〇〇	七〇	○	
四谷	四八、〇六二	一三、〇五〇	五、四五八	七六四	四七七	
牛込	一一四、五四九	三三、八五八	一、二〇〇	一六八	○	
小石川	一一一、五二八	三〇、八五四	一八、七六二	二、六二七	一、七〇八	
本郷	一〇七、二三八	二六、七〇七	一、五九八	二二四	九七	
下谷	一七九、九一〇	七九、五三三	三六、〇七三	五、〇五〇	一、五六九	
淺草	一一五、七五七	五六、五五七	六九、八六九	九、七八二	一、四四〇	
本所	一七五、〇〇〇	四七、二〇〇	三五、〇〇〇	四、九〇〇	一、八四九	
深川	一五八、一四二	三七、三二九	三〇、二一三	四、二三〇	一、七三七	
合計	一、八三七、二三五	五〇四、四五七	二〇五、〇二六	二八、七〇五	九、九六三	

東京の貧民窟に關しては日清戰爭前頃から「最闇黑の東京」と云ふものとか「日本の下層社會」三十二年横山源之助とか「貧民窟」原田東風三十五年とか云ふものに色々と書かれて居るから敢て詳しくは繰返して云はないが、近頃八釜敷云はれて居ることはトンネル長屋のことである。トンネル長屋と云ふのは、トンネルの樣になつた三尺計りの廊路の兩側に家が並んで居るのである。然し私が思つて居ることを明白に云へば東京の川向ふは殆ど全部貧民窟になりつゝあるのだが、私は此研究に於て貧民窟そのものゝ研究をしやうとして居らぬから東京の貧民窟はこれ位にして許しを乞ふ。然し最後に見逃しならぬことは最近十年に於ける東京の木賃宿の膨脹の著しいことである。なんでも三十三年頃には木賃宿は百四十五軒で一日平均四百三十二人の宿泊人があつたと云ふことであるが、三十九年末には百九十一軒に增加し宿泊人が九千七百四十六人となつて居る。そして四十二年頃にはその膨脹更に著しく市内十四個所に散在し六百六十軒と云ふ著しい數となり宿泊人一萬五千人に近かつたと覺えて居る。近頃になつて、東京市の木賃宿はどれだけになつて居るかは知らぬが、何にせよ著しき膨脹では無いか。

第三節　大阪の貧民。

大阪の貧民は思つたよりも少ない。一寸と見れば大阪は工業都市だ

から貧民が多い樣である。然し東京とは全く反對で、仕事はなんでもある。從つて貧民は少ない。之に就ては既に私が云つた通り、矢張り機械文明は貧民――第一次的貧民を減らすことはどうも事實であるらしい。

實際東京の貧民數の割合から云へば大阪は少なくも十萬の貧民はなければならぬことになるのだが、扨て、實際大阪に行つて貧民窟はと探すと、貧民窟と云ふものがどこにも無い。東京の樣な心持で貧民窟を探すとあてが違ふ。東へ行つても西へ行つても南へ行つても北へ行つても東京の樣な大きな密集部落は無い。昔は名護町と云ふ樣なものがあつたらしい――曰く「蜂の巣」「六道ノ辻」と云ふ昔の貧民窟の名所は今でも殘つて居る。然しそれも今は幸に美しい家になつて居る。だから、大阪は貧民窟を研究するものには少しも面白くない。勿論灘波貧民窟と云ふものが無いではない。南區東關谷町、勘助町、北島町、日本橋東一、二丁目西關谷町などを指して云ふのであるが、建築物から云へば少しも貧民窟らしくない。今日飛田の二百軒あたりは少し貧民窟臭いが、それでもまだ東京とは比較にならない。大阪は幸な處である。では貧民は無いかと云ふに、ある、ある、市役所の統計によると一萬四千五百五十五人あることになつて居る。(明治四十四年九月調)

	區役所の取調 戸數	區役所の取調 人員	警察署調査 戸數	警察署調査 人員	區役所調査による市外 戸數	區役所調査による市外 人員
一、家賃月額壹圓五拾錢以下	一、一〇一	男一、九四七 女二、〇〇一	二、二二五	三、八三九 三、八三一	三九一	四六九 五七七
二、同じく　貳圓　以上	五二三	一、〇五〇 一、一三五	八二六	一、一九二 一、四五五	二〇六	四二六 四八〇
三、季候天候により困難する者	五七八	一、一八二 一、六九	五五三	一、〇一九 九五四	二一三	三四四 三五一
四、木賃宿失業者	…	…	三一	三五 一六	五〇	八九 四三
五、立坊浮浪下等人夫	七五	一五四 一三七	一五四	二七七 一一八	一四六	一九一 一五九
六、祭日乞食	二〇	四四 五四	二七	三七 四〇	二九	三二 三六
七、殘飯其他自炊せざる下等食にて生活せる者	二一	三二 三二	三一	三一 八七	七九	九四 七〇
八、里子		四		一八六 二一六		三八 二一
九、不就學		二六七 三八五		四六九 四五三		二八五 二八八
計	二、三一八	四、六八〇 四、九一四	三、八四七	七、三八五 七、一七〇	一、一一四	一、九六八 一、九二五

そして貧民窟としては灘波、木津北島一、二、三町目、五番町、六番町、下寺町四丁目、日本橋東一、二丁目等を市役所では貧民部落と認めて居るが、日本橋二百三十戸、下寺町百四十八戸、東關谷町百八十四戸が極貧者だと云ふて居る。そして市外の貧民部落として

は特種部落の浦江、大仁などがあることになつて居る。然し市當局はどうしても歐米の統計から計算して五萬人はあると見ねばならぬと云ふて居る。

然しそれは兎に角大阪の生産率の激増と工場及職工數の激増に比較して貧民が思つたより少ないのは悦ぶ可きことである。然しよく考へると之も所謂ロンツリーの第一次的貧民であるから、大阪の不安は思つたよりも大なるものである。

大阪の工場數は七千二百四十二、（明治四十三年調）

原動力工場數	二、四八六	瓦斯機關	四〇三
石油機關	六九二	原動力を用ゐざるもの	四、二四二
水車	四八九	職工は	
汽鑵	四七一	四十三年	一〇〇、四八六人
電動機	四三一	大正元年末	一二七、九一三人

男五二、五四八人
女四七、九三八人
男七三、二九八人
女五四、六〇五人

然し勞働者なるものを入れると大阪は實に日本第一の勞働市であらう。

大阪市の木賃宿は二十七年には九十三、二十八年には百〇、四 最近に於ても多くはなつては居らぬ。然し大きくはなつて居る。今宮の木賃宿だけでも五千人は居るであらう。此木賃宿は殆んど罪惡の巣の樣なものである。新刑法實施當時は何十人と云ふものが此處から獄に投げ込まれた。

第四節　神戸市の貧民窟。 神戸の貧民窟と云ふのは七ヶ所にある。四つが大きいもの、三つが小さいものである。四つと云ふのは葺合新川、絲木、荒田、宇治川である。三つと云

ふのは琴緒町に、川崎に、尻池である。それで勞働者が七萬七千人、貧民がどんなに見積つても二萬五千人はある。（警察署の見積は此半分にも足らない一萬〇三百八十四人と云ふことになつて居る）新川が八千、絲木と荒田が各四千人、宇治川が三千、琴緒町が二千五百、川崎が千五百、尻池が二千人位であらう。新川は二千人計りの特種民が基となつて出來た貧民窟、日本でも大きな貧民窟であらう。現在木賃宿の人口八百人を除いて七千五百人以上居る。絲木は日本三大穢多村の最も大なるもの、支那語の發音を部落民が發して居る。宇治川も特種部落、荒田も特種部落が一部あつて、荒田一二三町目、紙屑長屋、燧長屋、牛屋裏などの半犯罪者の巣のある所、川崎は權藏部屋が八十以上もあり、貧民窟のあるところ、琴緒町は矢張り二ノ宮町などの貧民などゝ一種の貧民窟を成して犯罪者を多く出して居る。尻池も細民の一部落が居る。然し、最も激しいのは私の住んで居る新川の貧民窟で、神戸でも一番人口の密な處である。たとへば私の住んで居る北本町六丁目の如きは、戸數が三二〇戸あるが、正に千二百十二人と云ふ夥しい人々が居る。それが六十間四方にも足らぬ所に住んで居るのだから、堪らない。東京にもよくあるが、日本で一番野蠻な貧民窟名物二疊敷と云ふのがある。棟割長屋の汽車の樣なものに一坪半位ゐの家が鈴な

りに連つて居るのである。そして疊が二疊敷。それに或家には九人も住んで居るものが有つた。新川の貧民窟は益々大きくなつて行く。今その統計を擧げやう。然し葺合新川の貧民窟と云ふも實は一種の貧民窟と云ふ代名詞であるので、新川がどこからどこ迄とは限られては居らない。然し通例阪神電車以南春日野道以西新生田川以東となつて居るのである。それでその町數は十一。南本町四、五、六、吾妻通五、六、北本町二、四、五、六、日暮通三、六と云ふことになつて居る。そして之等の貧民は通例北本町五、六、を市場として買ひ出しに來るので、此取引をするものを新川のものと云ふて居るのである。然し之は木賃宿を除いての數字で、十四軒の木賃宿にはどうしても毎晩八百人以上が宿つて居るのである。

職業から云へば、四十四五種、仲仕、屎汲、日雇、人力車夫、馬丁、籠細工、青物屋、木挽、古俵買、農、表具師、傭、舟乘、手傳、土方、按摩、大工、肴屋、ちぼ管換屋、市役所人夫、息取、たどんや、井戸屋、菓子屋、古木屋、燐寸職工、紙屑拾ひ、工夫、古物商、藝人、豐年屋、葬式人夫、鉛職工、屑物買、鑄かけ屋、直し、辻占、煮賣屋、小間物屋、パンや、藥賣、飴屋、牛肉賣等である。その中一番多いのは仲仕に、土方に、手傳に、職工である。

私は此貧民窟に四年六ヶ月暮したので、以下に書かゝんとする、貧民心理も主として此

貧民窟内で經驗したことを基礎して書くのである。

序でだから葺合、新川の戸數と人口を擧げると、

		戸數	男	女	合計
明治四十一年		一、六四六	三、〇三六	二、八二三	五、八五九
同　四十二年		一、六五九	二、九六二	二、六七六	五、六三八
同　四十三年		一、六九六	三、一六九	三、〇九九	六、二六八
同　四十四年		一、六七四	三、三〇八	三、一二一	六、四二九
同　四十五年		一、七九四	三、四九三	三、四一二	六、九〇五
大正二年		一、九四四	三、八一〇	三、七〇〇	七、五一〇
南本町四丁目	一四二戸	六〇八人	北本町六丁目	三二〇戸	一、二一二人
南本町五丁目	一〇一	四六八	吾妻通五丁目	一四三	五七一
南本町六丁目	二〇九	九五四	吾妻通六丁目	三七九	一、二二一
北本町二丁目	七三	二六九	日暮通三丁目	一一三	四三五
北本町四丁目	七六	二九二	日暮通六丁目	一一八	四三六
北本町五丁目	二七一	一、〇四四	計	一、九四四	七、五一〇

之で見ると、過去六年間に戸數に於いて三百戸、人口に於ては千七百を增して居る。

勿論之には表筋に立つて居る家主の家や普通の商人などの百戸計りを除かなければならぬが、それでも、昔の鮫ケ橋より大きな貧民窟で、その人口から云ふなら先づ、日本で一二に數へらるる可き貧民窟である。(三十二年後の鮫ケ橋は五千〇六十四人位であつた。)

然し茲に一言して置く價値のあることは此貧民窟が、凡ての人の豫想外に健康地に立つて居ることである。その爲めに夏に蚊帳の必要が無いなど云ふことは全日本の貧民窟に類の無いこと、東京などでは聽かれぬ贅澤な話である。然し勿論之は清潔だと云ふ意味で無いことは知つて居つて貰はねばならぬ、共同便所などは六十戸に三つしか無い位だから。

此貧民窟の貧乏な最も善き例は、燈火のことである。私は今年の二月の或夕方貧民窟の燈火を調べに廻つたが、その四分の一は殆ど、眞暗闇で、僅に貳錢か參錢のカンテラで光を取つて居た。彼等は死んでも葬式が出來ない。私は彼等の多くを葬つた。四十二年には十四人、四十三年には十六人を葬つた。彼等の葬式を見て居ると人間とは決して思へない。或者は密柑箱につめられ、或者ほ茶箱、燐寸箱につめられて火葬場へ行く。語るさへ私は物凄い。

第五節　穢多村の研究。日本に於ける貧民を研究する者には穢多の研究は實に重要なるものであることは既に說いた。然し日本人が穢多に就て研究して居る處は實に僅である。起原に就ては「穢多の研究」と云ふ書がある。歷史的に研究せられたものには遠藤博士の「日本我」がある。社會的に研究せられたものには留岡氏の「社會と人道」などがある。然し

未だ未だ穢多の研究は之れで盡きて居らない。言語學的研究もまだ出來ては居ない。人類學的研究もまだ出來て居ない。遺傳學も彼等の中に多くの何物をか發見するであらう。然し私も彼等に關して知る處は全く皆無である。

なんでも內務省最近の研究によると、全國の特殊部落と云ふものが五千四百七十あつて、その人口が七十九萬九千四百三十四人ある相である。然し明治五年であつたか彼等が平民として民籍に編入せられた時には僅か三十八萬二千八百八十八人しか無かつたのだから、彼の增加率も又頗る著しいものだと云はねばならぬ。

さて部落數の多い順序から云へば、六百の廣島縣を頭として、福島、兵庫と云ふ順序であるが、人口の多いものから數へると、兵庫縣は一番多く、九萬五千九百七十二人、京都七萬二千人、福島縣六萬餘人、愛媛縣四萬五千人、大阪府三萬七千百七十人、岡山縣三萬七千人、三重縣三萬四千三百十七人、埼玉縣二萬六千人等の順序であるが、面白い事は北へ行く程、穢多の人口密度が稀薄になり、北海道では一つの特種部落さへない事である。

「穢多」と云ふのは一般的の名稱ではあるが、通例穢多の外に多くの特種部落があり、起原も異り、社會からの取扱ひも違つて居るのである。江戸時代には穢多の下には非人があ

大正四年十一月十一日印刷
大正四年十一月十五日發行
大正六年二月廿五日再版
大正七年九月二十日三版

貧民心理の研究

定價 貳圓五拾錢

不許複製

著作者 賀川豐彦

發行者 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
福永文之助

印刷者 横濱市太田町五丁目八十七番地
村岡平吉

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
警醒社書店
(振替東京五五二參番
電話新橋一五八七番)